

# 「訪問で薬の効き具合実感」

「たまに吐き気があるんです」。秋田市の自宅で膵臓がんの母親(87)を介護する長女(64)は8月中旬、往診に訪れた市原利晃さん(45)と市原、秋田往診クリニック理事長にこう訴えた。

母親が吐いたのは、1日2回飲んでいる痛み止め(医療用麻薬)だった。訪問薬剤師指導のため同行した薬剤師齋藤淳さん(43)と市原、ピー・アンド・エス社は「飲み薬を減らした方が、吐く可能性は減らせますね」と市原さんに提案。市原さんは「今回吐いた痛み止めは一番大事な薬なので、貼り薬に変えてみよっか。完全に飲めなくなったらの切り替えは大変だからね」と同調した。

痛みがあると食べたり飲んだりするのも、おっくう

とどいくす

秋田・在宅介護の現場から



家族に薬の説明をする齋藤さん

## 薬剤師×医師 寄り添って処方検討

およそ30分後。いったん薬局に戻っていた齋藤さんが貼り薬を持ってきた。「こ

になる。「痛みのコントロール」はがん患者にとって最も重要だ。薬を吐き出し、十分な効果を得られないため、市原さんは毎日服用する医療用麻薬を錠剤から貼り薬へ切り替えた。

服用についても不安を抱く長女に、齋藤さんは一つ一つ丁寧に説明した。

以前処方され、まだ残っていた吐き気止めの錠剤の服用については、医師の判断が必要となるため、齋藤さんはその場で市原さんに電話。貼り薬に切り替えた副作用で数日は吐き気が出る可能性もあるため、3日間服用することになった。

の薬は効果がじんわり出てくるので、今日だけは飲み薬も併用しましょうね。薬の成分が変わったから、まずは1週間この量で様子を見ましよう。ほかの薬の

市原さんは「すぐに薬剤師とやりとりできるので助かる。薬剤師も訪問することによって、患者の状況や薬の効き具合を実感でき

る。室長を務める齋藤さんは、多い日で1日に7、8軒回ることも。ただ、依頼する医師はごく一部に限られているのが現状だ。同社は患者の最寄りの薬

る。患者に寄り添うことで、薬剤師の知識が臨床現場に生かされ、将来的には薬剤師が医師に「この薬はどうか」と提案できるようになれば理想的だ」と話す。

県内で薬局11店舗を展開するピー・アンド・エスは、2007年から訪問薬剤師指導に力を入れ始めた。12年からは在宅医療連携室を設置。室が中心となって秋田市内全域を訪問してい

局で調剤ができるよう、齋藤さんを市内全9店舗に薬剤師として登録した。齋藤さんとは別に、各店舗にはそれぞれ薬剤師が登録されているが、全てに登録することで、どの店舗でも調剤が可能となる。

こうした工夫は、薬を届けるまでの時間を短縮するだけでなく、身近な薬局の薬剤師の訪問で患者に安心感を与えている。なかなか人線りがつかず事業を拡大できずにいるが、いずれは市内で培ったノウハウを県南、県北へも広げていきたい考えだ。

「薬剤師が訪問して薬剤師の管理指導を請け負えば、在宅での医師や看護師の負担が減り、それぞれ専門的な仕事に集中できる」と齋藤さん。「自分たちも薬がどう効果を発揮しているのか、そばで見られて勉強になるし、やりがいも感じます」と充実した表情を見せる。

訪問薬剤師指導を積極的に進める薬局はまだ少ないが、齋藤さんは「薬剤師も来局する患者の容体の変化にしっかり気付き、訪問指導をはじめ、ケアマネジャーや医師、民生児童委員になくなど『提案する薬局』に変わっていかないといけない」と話した。

(喜田良直)